科学研究費助成事業（基盤研究（Ｓ））研究進捗評価

課題番号	16H06301	研究期間	平成２８(2016)年度 ～令和２(2020)年度
研究課題	心の自立性の獲得－環境から解放された心の進化と発達	研究代表者 （所属・職） （令和４年３月現在）	藤田 和生 （京都大学･文学研究科･名誉教授）

【令和元(2019)年度　研究進捗評価結果】

評価		評価基準
	A＋	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○	A－	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（意見等）

本研究は、「心の自立性」の発展過程を広範な種比較と発達比較により解明することを目標としている。これまでの進捗では、多様な動物種を対象とした精緻な実験計画の実施により、それぞれの種個々の実験結果の蓄積という点で、質、量ともに高い成果が上げられていると判断できる。その一方で、「心の自立性」の解明に向けた人間や動物に共通する仮説の提示と検証という側面では物足らず、最終目標に向けて順調に進められるのかが懸念される。今後は両者を並行して探求することにより、世界的に評価される大きな研究成果を期待する。

【令和４(2022)年度　検証結果】

検証結果	
Ａ－	当初目標に対し、概ね期待どおりの成果があったが、一部十分ではなかった。 本研究では、「心の自立性」を多様な種において比較することによって、その進化・発達過程を解明することを目標としていた。研究成果としては、未来に自身を投影する能力の種差は大きく、ヒトでも５歳以上で達成できること、チンパンジーが他者の誤信念を理解している可能性があること、霊長類・伴侶動物では他者理解に自己経験が影響することなどを明らかにしている。これら個々の成果は、多様な動物種での心の自立性を分析した貴重な結果であるが、研究進捗評価でも指摘されていた「人間や動物に共通する仮説の提示と検証」に関しては明確にされておらず、「その進化・発達過程を解明する」という最終目標への到達までには至っていない。